

毎週末になると、次の通心には何を書こうかとネタ探しを始めます。決まって直前まで悩む自分に対して、もう一人の自分がこうつぶやきます。「もっと早くから準備すればいいのに」。これを聞いた私はこんな言い訳をします。「伝えたい内容は日々更新されるから、発信日に近い方がより心がこもるんだよ」。自分の頭の中でこうしたやりとりが行われているときに、ふと手に取った一冊があります。『日本一心を揺るがす新聞の社説4』(水谷もりひと/ごま書房新社)。この本の表紙裏には、著者の水谷もりひとさんのサインが書かれています。そこに添えられていたのは、「絶対に動かない支点を持つとう!」という言葉でした。教員として働いてきた10年間、数えきれないほどの失敗を積み重ねてきた中で、自然と自分の中に支点ができていたことについて最近気付きました。そして、教員という志事を離れてもうすぐ3か月になります。たった3か月ですが、“支点”を取り囲むように新たな“視点”が次々と生まれてきています。その視点をいかに幅広くもち、かつ深くしていくか。そのためには目の前のことに全力を注ぐことだと言いつつ聞かせながら、悪魔のささやきに対抗していきたいと思えます。

絶対に動かない支点を持つとう!

「出会い」とは、「探していたものが見つかった」ということを表層的に表現した言葉に過ぎないのだ。それは、あの日、あのとき、切羽詰まった状況の中でハローワークに出掛け、「宮崎中央新聞記者募集」と書かれた求人票と出会ったのと同じである。

海のものとも山のものとも分からず、とりあえず面白そうだったので面接に行ったのだが、自分の潜在意識は「探していたものがやっと見つかった!」という感覚だったのではないかと思う。

そのハローワークでの出会いが後に、自分の人生にとって欠かせない、大きな存在になっていくなど、当時は想像だにしていなかった。少なくともその1年後に経営者からこの新聞を譲り受けるとは思ってもみなかった。

しかし、実際に当時の経営者がその話をしてきたとき、潜在意識はきつこうつぶやいたに違いない。「待ちました。ようこそ私の人生に」。

潜在意識という概念は、この10年くらいで随分世の中に広まった。それは「もう1人の自分」ともいわれている。たとえば「恋人がほしい」と思っている、潜在意識が「恋人なんて面倒くさい」「自分の時間がなくなる」などと思っていると不思議と出会いが訪れない。

「ダイエットしよう」と決意しているのに、潜在意識から「今日は特別な日だから食べてもいいよ」とささやかれると、つい食べ過ぎてしまう。

人生の悩みのほとんどは、自分の頭で考えている顕在意識と、「もう1人の自分」が考えている潜在意識が一致しないことから生まれる。どちらも「本当の自分」だからこそ悩むのだ。

人生、物事がうまくいっているときは、この「2人の自分の意識」が一致しているときなのだそうだ。

以前、潜在意識の専門家から、その「2人の自分の意識」を一致させるコツを聞いた。それは「支点を持つこと」だという。

「支点」とは、テコの原理の要になるところである。テコを使うと大きな物でも小さな力で持ち上げることができる。それは固定された支点が絶対動かないからである。

そういう「絶対に動かない信念」、すなわち、それが「人生の支点」になる。

たとえば「会社のトイレ掃除は自分がする」と決意した経営者がいたら、それがその人の支点になるし、「職場に誰よりも早く出社して掃除をする」という人にとっては、それが支点になる。将来自分の夢を実現させるためにコツコツ努力してお金を貯めている人がいたら、それがその人にとっての支点だ。

「これをやりたい」「こうありたい」の後に続く、「でもお金がない」「でももう年だから」といった否定的な言葉は言わない。これが動かない支点をつくるコツだ。

25年を振り返ってみると、どんな状況下にあっても「心に響く言葉を届けたい」という支点があった。

支点を持つとう。それは必ずあなたの人生を持ち上げる。

『日本一心を揺るがす新聞の社説4』(水谷もりひと/ごま書房新社)

もう1人の自分を悪魔のささやきなどと言わず、一番の味方と捉えて対話してみるとおもしろいかもしれません。もしかすると「支点」は、すでに自分の心の中にあるものなのかもしれません。いちばんの